連　載

積算四方山話⑪

積算事務所の社長さんはゴルフがお好き

野呂 幸一
元 公益社団法人日本建築積算協会 会長

＜筆者略歴＞
1941年東京神田生まれ。1964年早稲田大学建築学科卒業後、大林組入社、本店（大阪）建築部積算課勤務。コンピュータの利用研究に着手、その後システム部門（東京）に転勤し、積算プログラムを起点に概算精算見積、原価管理、現場システム、施工図CAD、維持保全、企画プレゼンなどの開発に従事、情報ネットワーク、EDI、AI、CGなどの利用研究。1999年退社後、JCC総研設立、中堅・中小ゼネコンの情報化支援、クラウドシステム、e-ラーニングソフトの開発、IT教育にも尽力。

積算事務所の成功者のパターン

積算事務所の草創期、事務所を創設して経営に成功した社長さん達には、一つのパターンがあった。まず自宅の見直しであり、改築や新築、またはマンションの購入などを行い、次に高級車の購入である。そして最後はゴルフ会員権の購入へと進んでいった。対象となるゴルフ場は、有名なコースが多く、社長さん達は、会員権を購入したゴルフ場に週一度は通っており、お互いに自慢し合っていた。中には、ただ通うだけでなく、ゴルフ場の役員を務めたり、一生懸命練習してシングル級の腕前を持つようになった人も少なくない。

建築積算協会のゴルフコンペ

建築積算協会の発足時には、このような社長さん達が大勢参加していたこともあり、協会ではよくゴルフのコンペが開催されていた。

ある日、協会の委員会に出席すると、終了後隣に座っていた社長さんから、「君はゴルフをやるのか」と聞かれた。「ええ、下手ですが」と答えると「いくつで回っているんだ」と言う。「100を切れればいいのですが」と返すと「そうか、それならばハンディを28やるから協会のコンペに来い」とのことだった。

更に話を聞くと、協会のコンペは、名門コースでしかやらないそうで、次回は小金井カントリー倶楽部で開催すると言う。小金井カントリー倶楽部は、都心に近く、名門中の名門で名前は知っていたが私などが行けるゴルフ場とは夢にも思っていなかった。

恐る恐る行ってみると、20名ぐらいの社長さん達が参加しており、楽しげに歓談していた。

初めてお目にかかる社長さんがほとんどであったが、その後何回か参加するうちに、ほぼ全員の社長さん達と知り合いになった。ゴルフの合間には積算事務所の実態などを聞かされ、その経営の悩みなどを知ることができた。

ゴルフの達人

今思い出すと本当にゴルフの上手な人達が大勢揃っていた。

その一人に伸建築事務所社長の江原伸氏がいた。

仲間の社長さん達の話を聞くと江原社長は、50歳からゴルフを始め、数年で「クラチャン」に輝いたとのことだった。

クラチャンとは、クラブチャンピオンを略した言葉であり、各ゴルフ場で年に１回開催される「クラブ選手権」という大会に優勝したゴルファーのことをいうが、ゴルファーにとっては、ゴルフ場のナンバーワンの称号を得ることができるため、大変名誉な称号ともなっている。

江原氏は、神奈川県にある名門の「長竹カントリークラブ」の会員となり、瞬く間に腕を上げてクラチャンとなった。クラチャンの実力とはどのくらいなのか、協会のゴルフコンペで同伴者となった時に拝見する機会があった。その日、江原氏は、いきなりスタートの１番ホールで一打目をバンカーに入れ、バンカーからの脱出に失敗し、スコアは、トリプルボギーとなってしまった。「いやあ、参ったな」と苦笑いをしていたが、何と次の２番ホールから９番ホールまですべてパーで回り、アウトコース

は39だった。インコースは37だったが、30台など素人のゴルファーでは、長年ゴルフをやっていても一度も出せない驚くべきスコアであった。

ゴルフの練習に励み腕を磨く

江原氏とは、その後、何度かゴルフに誘われ、見事なプレー振りに驚かされたが、プレー中に何度かポイントレッスンを受け、私のゴルフ改善に役立った。

また協会のコンペに参加するようになってから、上手な社長さん達から刺激を受け、私はゴルフの練習にも熱心に取り組むようになった。そして、100を切れなかった実力も90をコンスタントに切れるところまでになった。

今でも鮮明に覚えているのだが、協会のコンペが東京の外れにある「よみうりゴルフ倶楽部」で開催された時のことである。最終の18番ホールに立った時、同伴者の一人から「ここをパーかボギーで上がれば、70台でいけるぞ」と言われた。私は、２、３ホール前から意識していたが、同伴者に言われて急にプレッシャーがかかった。しかし何とかプレッシャーに耐えボギーで上がることができ、トータルスコアは“79”だった。初めての70台のスコアである。これは正に協会のコンペのお陰であり、上手な社長さん達の指導の賜物であった。今でもみなさんに感謝している。

コンペ後の付き合いも楽しい

協会のコンペには、マイカーを使わず電車とクラブバスを利用して来る人達もいた。そして帰りは、仲間の車で途中まで乗せてもらっていた。

私は、マイカーで行っていたが、コンペのゴルフ場が東京の北西部にある場合は、帰りはいつも決まった三人が同乗した。積算事務所を経営していた福永氏と向後氏、それに竹中工務店の足立氏であった。足立氏は、当時、積算協会の関東支部長であり、大変話好きの愉快な人だった。

この三人は、1930（昭和５）年頃の生まれで、中学か高校の同級生のようだった。帰りは、まず向後氏の自宅に寄り、ここで全員が降りて会食となった。私以外の三人は、酒を飲みながら、昔話に興じていた。小学生の頃は、戦争中であり、戦後の大変な時期を経験していたが、その経験を面白可笑しく話し合っていた。私は、車の運転があるため、酒は控えていた。そこでもっぱら聞き役となったが、三人は本当に楽しそうに話していた。

向後氏の自宅を出ると直ぐに最寄りの駅前で足立氏は車から降り、最後はいつも福永氏と二人になった。

カラオケ舞台

福永氏の自宅は、新築して数年の立派な一戸建てで奥様と二人で暮らしていたが、ある時、自宅に上がるよう勧められた。そして広いリビングルームに案内された。リビングルームに入ってみると、片方の壁際にソファーと背の低い洒落た小さなテーブルが置かれてあり、反対側の壁は天井から大きなカーテンが垂れ下がっていた。

奥様が入ってきて、簡単な挨拶の後、ソファーに案内された。奥様と他愛ない話をしていると、普段着に着替えた福永氏が入ってきて、いきなり垂れ下がったカーテンを引き分けた。すると何とそこにカラオケ舞台が現れた。

「俺はカラオケが好きで、自宅に舞台まで作っちゃった」と言って、舞台の脇にある装置に電源を入れ、マイクを手にした。すると大きなスピーカーから福永氏の声が感度よく流れてきた。「今から歌うから聴いてくれ」と、何やら機械を操作すると、音楽が鳴りだした。どうやら演歌らしいと思っていると、福永氏の歌声が聞こえてきた。中々の美声である。また声に味があって、演歌に向いていた。

福永氏は、酒の酔いが残っているのか、少々赤い顔をしていて、二、三曲立て続けに歌った。すべて演歌であったが、ドスも効いていて中々うまいものだと感心した。そして「君も何か歌え」と言われ、演歌が苦手な私は、もっぱらポピュラーな曲を歌った。奥様も何曲か歌い、大いに盛り上がり、楽しいひと時であった。

当時の社長さん達は、積算事務所の経営が順調であったためか、ゴルフを始め、いろいろな趣味を楽しんでいた。

関西の大御所にも誘われたゴルフ

前回ご紹介した関西の大御所の生島道春氏もゴルフを楽しんでいた。私は、生島氏から何回か誘われ、関西や九州でもプレーをした。

生島氏が連れてくる同伴者は、一見職業不詳で一風変わった人が多く、話し方に独特の雰囲気を持っていた。また一度は「俺のコーチだ」と言って、女子プロのなれの果てのおばさんが同伴したこともあった。

ゴルフが終わると、そのまま飲み屋に直行した。今思い出すのは、九州でプレーした時のことである。その日は、午後から天気が崩れ、急に寒くなりプレーが終わる頃は、霙（みぞれ）となった。ゴルフは早々に切り上げ、着替えもせずに車に乗り込み、博多の飲み屋へ駆け込んだ。そこはふぐ料理を得意とするカウンターだけの小さな店であったが、カウンター越しに前掛けをした年配の親父が一人包丁を持って何かを切っていた。生島氏は、店に入るなり、「熱燗をくれ」と言ってカウンター前の椅子に腰かけた。同伴者の我々三人も手荷物を床に置いて並んでカウンター前に腰を下ろした。するとすぐに熱燗が４本とお猪口が出てきて、各自が手酌で飲み始めた。驚いたことに生島氏からは何も注文が出ていないのに、熱い小鍋がそれぞれに出てきた。鍋の中を見るとふぐの臓物らしきものがぐずぐず煮立っていた。「これは何ですか」と聞くと「白子だ」と言う。私は初めて食するものだったが、これが今でも忘れられないほど美味だった。

私以外の同伴者の二人は、既に来たことがあるようで、嬉しそうに酒を口にしては黙々と食べていた。

大御所に案内された大阪ミナミ

生島氏は、大阪ミナミの食べ物屋や飲み屋に詳しかった。私は、出張の折などに生島氏の会社を訪問すると、挨拶の会話を早々に済ますと直ぐに「行こか」と言われて外に連れ出された。生島氏の会社は、大阪ミナミの繁華街まで歩いて行けるところにあり、いつも違う店に案内されたが、出てくる肴は、東京とは違う旨味があり、大阪人の食に対する思いを感じた。

生島氏には、決まった飲み方があった。まずビールを注文する。これは生でなく瓶ビールであり、コップで二、三杯飲むと次は熱燗となる。冷酒はほとんど飲まなかった。そして小一時間すると「散歩に行こか」と言う。これは次の店に行くぞという合図であった。

次に行く店は、立派なカウンターのあるバーがお決まりであった。白いシャツに黒のベスト、そして蝶ネクタイを付けた若いバーテンダーがにこやかに迎えてくれた。この若者の言うことには、「私は生島の子分です。生島に何かあれば直ぐに駆け付けます」とのことだった。

生島氏は、バーボンがお好みでいつもジャックダニエルをオンザロックで飲んでいた。

しかし生島氏は、１時間も経たないうちに「散歩に行こか」と言って椅子から立ち上がり、外へ出て行く。私は、急いで後を追うことになるが、次に行く店は、小奇麗なクラブだった。当時の大阪ミナミは、宗右衛門町に大小様々なクラブがひしめき合っており、道頓堀川の北岸に歓楽街が広がっていた。

いろいろなクラブに案内されたが、比較的大きなクラブのピアニストと生島氏は仲がよかった。

このクラブに行くと、「生（いく）ちゃん、いらっしゃい」と言ってホステスが寄ってくるが、ここでピアノの演奏をしているピアニストもやってきた。

このピアニストは、恰幅がよく“丸ちゃん”と呼ばれていたが、生島氏とは兄弟のように仲がよかった。丸ちゃんはゴルフがシングル級の腕前で、私は、生島氏に誘われたゴルフで何度か一緒にプレーをしていた。「最近、調子はどうですか」と言いながらゴルフの素振りなどをして、丸ちゃんとのゴルフ談義を楽しんだ。

生島氏は、時々、丸ちゃんの伴奏でポピュラーな曲を歌った。生島氏の声は、少し高音でいつも静かに歌っていた。今思い出すのは、生島氏の会社が10周年を迎え、懇親会が開かれ、社長の生島氏が挨拶に立った時のことである。私も招待客の一人として出席していたが、生島氏は、「挨拶替わりに歌を歌います」と言って素晴らしい声を披露したことがあった。私は、聞いたこともない歌であったが、来

場者はみな生島氏の歌を聞き、10周年の喜びを感じていた。生島氏は、静かな歌が好きだった。

多彩な趣味

宗右衛門町のクラブでも、一つのクラブに留まらず、少し経つと別のクラブに移ることが多かった。

あるクラブに案内された時、壁に飾ってある絵が気になった。そこで愛想よく出てきたママに「あの絵は、ブラックですか」とちょっと知ったかぶりをして聞いた。ブラックとは、パブロ・ピカソとともにキュービズムの創始者の一人と言われるジョルジュ・ブラックのことだが、傍で聞いていた生島氏は、突然大声で笑って「あれは俺の絵だ」と言った。これにはさすがに驚いてしまった。「絵を描くんですか」と聞くと、気が向くと筆を執るとのことだった。

生島氏と飲み屋に行くと、必ず一枚の写真を見せられた。写っているのは、猟犬である。そしてこの猟犬の最近の活躍が語られた。生島氏は、猟が趣味だった。日本のみならず冬になると韓国の釜山などまで出かけて猟をするとのことだった。

しかし一番熱心に取り組んでいたのは、プラモデルのようだった。特に戦闘機がお好みでゼロ戦などのプラモデルの作成に熱が入っていた。話を聞くと写真を丹念に観察し、資料なども読み込み、戦闘機の細部の構造や取り付けられた機器を知り、正確にプラモデルを作成していくとのことだった。またプラモデルに使用する塗料は、英国のハンブロール社が最高であり、塗った後、刷毛むらが自然になくなり滑らかになるとのことだった。しかし日本では手に入りにくくて難渋しているとこぼしていた。

実は、積算協会の視察旅行で英国のRICS[1]を一緒に訪問した折、日曜日は、自由行動となったことがあった。同行のみなさんは、家族などへのお土産を買いに行くというのに生島氏は、「大英博物館に行ってメッサーシュミットを見たい」と言って一人で行ってしまった。

メッサーシュミットとは、ドイツの戦闘機である。第二次世界大戦で大活躍したが、生島氏にとっては、この視察旅行で最も見たいものであり、そのために参加したようであった。博物館から帰って来た時は、「俺の英語も通じた」などとニコニコ顔で大変満足の様子だった。

またレディーバードというプラモデルの愛好者が集まるクラブの会員であり、大阪の中之島でクラブの発表会があるので来ないかと誘われた。そこで早速、新幹線に乗って行ってみると、会場はそれほど広くないひと間だったが、部屋には、大きなテーブルがいくつか置かれてあり、それぞれに会員の作品が展示されていた。「プラモデルの発表会に来たのは初めてです。随分いろいろなプラモデルがありますね」と言うと、「そうか。俺のプラモデルはこっちだ」と言って一つのテーブルに案内された。そこには、戦闘機が10台ぐらい展示されており、生島氏は、嬉しそうにプラモデルをいかにして作成したかを話してくれた。

生島氏は、その他にも日本刀や銃にも造詣が深く、そういったことに全くの素人の私などは、話を聞く度に感心させられた。

生島氏は、ゴルフだけでなく、歌、絵、猟、プラモデル、日本刀や銃など、幅広い趣味を持っていたが、夜のクラブめぐりほど似合うものはなかった。

飲み方の師匠

生島氏は、私が大林組に入社し、大阪本店の積算課に配属された時の先生だったが、積算よりも酒の飲み方を教えてくれた師匠だった。

「酒は飲んでも飲まれるな」と教えられ、飲んでいるうちに酔っぱらい、話がくどくなったり、大声になることを嫌った。いつも静かにゆったりと飲むのを好んだ。

私は後年、「趣味は何ですか」と聞かれると冗談半分に「夜のクラブめぐりです」と答えることがあるが、到底師匠の生島流には及ばない。未だに生島流は憧れであり、懐かしい思い出に溢れている。

1　Royal Institution of Chartered Surveyors
（英国王立チャータード・サベイヤーズ協会）
1868年に英国で設立された、土地・不動産・建物分野等における国際的職業専門家団体。